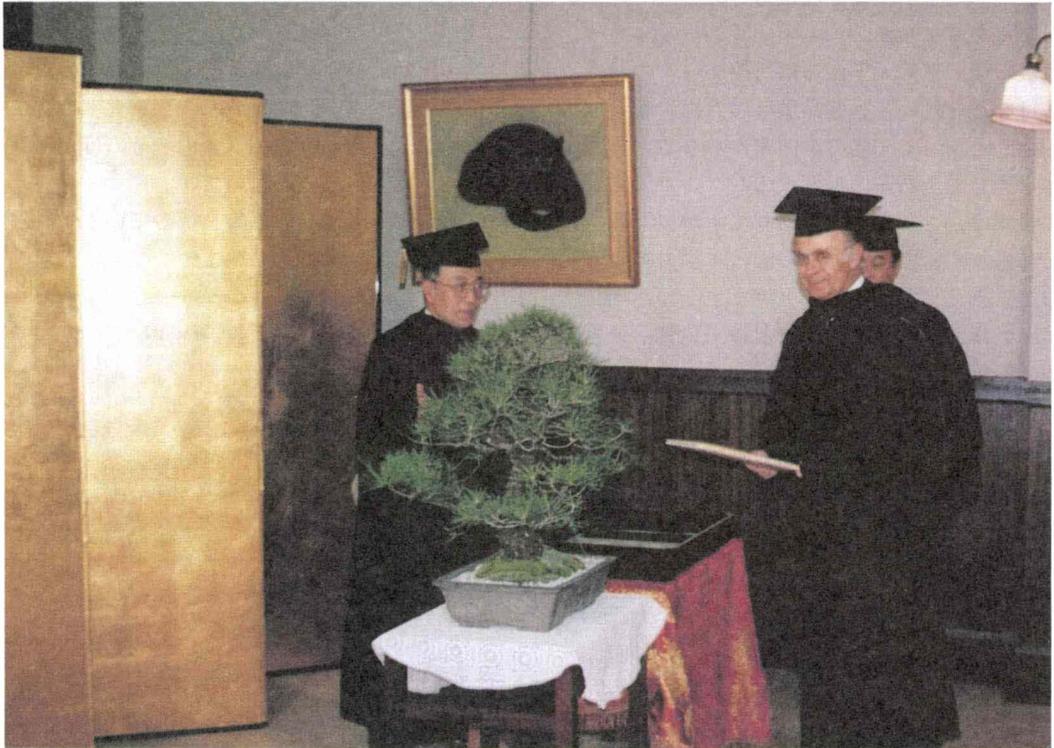


京大広報

No. 479

京都大学広報委員会



名誉博士称号贈呈式 —関連記事本文901ページ—

目 次

兵庫県南部大地震について 総長 井村 裕夫……901	部局長の交替等……………906
<大学の動き>	<コラム>
名誉博士称号贈呈式……………901	いちと一と1 小野山 節……906
平成6年度の停年退職教官……………902	<随想>
平成7年度入学者選抜学力試験	“Tawarascher Knoten”
(第2次学力検査)の期日等……………905	名誉教授 河合 忠一……907

兵庫県南部大地震について

総 長 井 村 裕 夫

去る平成7年1月17日早朝、近畿地方を大地震が襲い、阪神地区を中心に甚大な被害が出たことは誠に不幸な出来事であります。被害の状況を知るにつけ、その大きさに胸が痛み、言葉を失う程であります。亡くなられた多くの方々とその御遺族に心から哀悼の意を表しますとともに、被災された方々にお見舞いの言葉を申し上げます。

地震によって京都大学にも被害がありました。現在、調査中ではありますが、学生・教職員の中には亡くなられた方、負傷された方もあり、そのほかご家族を失われた方、住宅に被害を受けられた方などが少なくありません。

地震の後、京都大学からは医療チームの派遣、生活用品の援助、神戸大学医学部附属病院への患者食の送付などを行い、医薬品供与の計画にも参加しています。また、本学防災研究所と東京大学地震研究所が中心となって56名の専門家からなる調査団が編成され、調査活動を行っています。そのほか様々な団体を通じて、あるいは個人のレベルで、支援活動をされている方もあると思います。

本学では、ささやかではありますが被災者の方々に援助するべく義援金の募集を行っています。被災地にお送りするとともに、一部は本学の被災者へのお見舞いとしてと考えています。多くの方々の御協力を頂きたいとお願い申し上げます。

兵庫県南部地震の残した傷痕は予想外に大きいものがあります。一日も早い復興へ向けての協力の絆を強めて行きたいと思えます。

<大学の動き>

名誉博士称号贈呈式

1月17日(火)午前10時30分から総長室において、各研究科長及び関係者出席のもとに名誉博士称号贈呈式が挙行され、ドイツ連邦共和国エッセン大学教授クリスチャン シュトレッファー氏に、京都大学名誉医学博士の称号が贈呈された。

また、贈呈式の当日、国際交流会館(芝蘭会館)において同氏の記念講演が行われた。演題は「ヒト腫瘍の不均質性—治療に如何なる結果をもたらすか—」である。

以下に同氏の略歴及び贈呈の趣意を紹介する。

(略 歴)

Christian Streffer (クリスチャン シュトレッファー)

1934年7月5日生、国籍 ドイツ連邦共和国

1963年1月 フライブルク大学 哲学博士
(Ph.D.) 学位取得

1964年 フライブルク大学放射線医学研究

所 研 究 員

1972年 フライブルク大学放射線医学研究
所準教授

1975年 エッセン大学医学放射線生物学主
任教授

1976~1977年、1981~1983年
エッセン大学医学部長

1984~1985年 ロチェスター大学客員教授

1988~1992年 エッセン大学総長

1993年 エッセン大学医学放射線生物学主
任教授

(趣 意)

ヨーロッパ放射線生物学会会長、エッセン大学教授クリスチャン シュトレッファー氏は、放射線生物学者として、放射線科学の分野における発展に顕著な業績を挙げ、世界の研究者に多大の影響を与えてきた。

同氏は、放射線の生体に対する作用機構が解明されていない時代に、トリプトファンと NAD の

代謝において数多くの重要な酵素機能が放射線照射後変化することを明らかにし、さらに5-ハイドロキシトリプタミンの放射線防護剤としての機構を解明した。また、世界の研究者や学生に広く読まれている『放射線生化学』と題する著書の刊行や、着床前のマウス胎児に電離放射線を照射する研究で、放射線による奇形は前着床期の被曝でも起きることを世界で最初に発見した。さらに、これらの研究成果をもとに、現在国際的に研究が進められている新しい癌の治療法である温熱療法の実用化や、放射線治療における治療効果の先行指標の開発など、放射線医学、生物学、生化学などの

分野における研究の推進に大きく貢献した。

同氏は、1967年8月に初めて本学を訪れ、医学部の放射線障害の防禦と治療に関する研究グループと研究交流を開始し、その後8回に及ぶ来学で学術講演会・討論集会・情報交換などを行い、放射線の化学的防禦研究、癌の温熱療法、放射線増感剤の開発研究、中性子捕捉療法の基礎研究など、本学の研究者や大学院学生に大きな影響を与えた。また、本学研究者を積極的にエッセン大学のリサーチフェローとして受入れるなど、本学の研究教育に大きな功績を残した。

平成6年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により、次の方々（教授43名、助教授6名、講師1名、助手2名）が、本年3月31日付けで退職される。

部局・職名	氏名	生年月日	出身地 出身校	講座等	研究分野
総合人間学部 教授	磯江景孜	昭和 6.12.13	鳥取 京大	人間学科 人間基礎論講座	西欧近代哲学に関する研究
〃	田中禮	〃 6.6.2	兵庫 庫大	国際文化学科 欧米文化・社会 論講座	1930年代の黒人文学を中心とした研究
〃	旦代晃一	〃 7.1.19	東京 京大	基礎科学科 数理基礎論講座	微分幾何学に関する研究
〃	川崎辰夫	〃 6.5.5	千葉 葉大	基礎科学科 情報科学論講座	ランダム系の統計力学的、計算理学的研究
文学部 教授	小野山節	〃 6.6.14	高知 知大	史学科 考古学講座	王陵を中心とする古代文明の比較考古学的研究並びに古墳時代馬具の研究
〃	朝尾直弘	〃 6.12.17	京都 都大	史学科 国史学第二講座	日本近世史の研究
〃	清水善三	〃 6.5.13	静岡 岡大	哲学科 美学・美術史学 第一講座	日本仏教美術史の研究、特に平安・鎌倉時代の彫刻史を主に様式史の立場から研究、仏師と仏師組織についても研究
教育学部 教授	田中昌人	〃 7.1.22	岡山 山大	教育学科 教育指導講座	発達診断に基づく教育指導理論の科学的体系化及び可逆操作の高次化における階層一段階理論と発達保障論の研究
〃	稲葉宏雄	〃 6.8.16	岐阜 阜大	教育学科 教育課程講座	①到達度評価に関する研究 ②学問中心教育課程の研究
〃	柴野昌山	〃 7.1.5	京都 都大	教育社会学科 生涯学習計画講座	変動社会における生涯学習課題と学習要求の分析及び社会と学習環境の再組織に関する教育社会学的研究

部局・職名	氏名	生年月日	出身地 出身校	講座等	研究分野
教育学部 教授	岨中 達	昭和 6. 7. 4	滋賀 大	教育心理学科 視聴覚教育講座	大学生の修学不適応の臨床教育学的 研究 わが国の大学カウンセリングの発達 史的研究
大学院法学研究科 教授	清永 敬次	〃 6. 9. 1	山口 大	公法専攻 租税法講座	所得課税法の諸問題及び租税回避理 論の比較法的研究
経済学部 教授	中村 哲	〃 6. 7. 15	愛知 大	経済学科 経済史・思想史 講座	日本を含む東アジア経済の歴史、特 に近現代の資本主義化過程の理論的 研究
〃	山田 浩之	〃 7. 3. 14	大阪 大	経営学科 経営政策講座	都市・地域・交通など空間にかかわ る経済現象、特に都市化・土地問 題・交通混雑等の経済学的研究
理学部 教授	玉垣 良三	〃 7. 3. 30	三重 大	理学科 原子核論講座	原子核の理論的研究、特に核力及び 核物質に関する研究
〃	中川 一郎	〃 7. 2. 8	奈良 大	地球惑星科学専攻 固体地球物理学 講座	重力の空間的分布並びに時間的変化 の研究、地球潮汐の研究及び精密測 位の研究
工学部 教授	柴田 徹	〃 7. 2. 9	東京 大	土木工学科 土質力学講座	地盤工学に関する研究
〃	嶋本 讓	〃 6. 9. 13	東京 大	機械工学専攻 熱流体工学講座	内燃機関のガス流動系の最適化並び に流動現象の数値予測に関する研究
〃	若松 貴英	〃 6. 12. 13	徳島 大	資源工学科 精製工学講座	鉱物処理工学及び環境、省エネルギ ーを考慮した資源循環工学に関する 研究
〃	一瀬 英爾	〃 6. 10. 25	東京 大	エネルギー応用工 学専攻 エネルギー材料 工学講座	材料プロセス物理化学、鉄冶金学、 冶金熱力学に関する研究
〃	櫻井 健郎	〃 6. 5. 11	東京 大	航空宇宙工学専攻 航空宇宙解析工 学講座	回天流体力学の理論的研究、特に、 スピンドウン、ヒートアップ及び太 陽回転の進化等の非定常現象の研究
〃	森岡 茂樹	〃 6. 4. 6	東京 大	航空宇宙工学専攻 航空宇宙基礎工 学講座	気体力学、磁気気体力学、混相流体 の力学に関する研究及び磁気プラズ マ流れ、液体金属 MHD の研究
〃	梅村 勲	〃 6. 7. 19	岐阜 大	原子核工学専攻 量子物質工学講 座	素粒子論、特にハドロンとの相互作用 と複合モデル及び素粒子とその相互 作用の統一理論に関する研究
〃	人見 勝人	〃 7. 1. 16	大阪 大	精密工学専攻 システム工学講 座	生産システム工学に関する研究
〃	松本 吉弘	〃 7. 2. 21	東京 大	情報工学科 情報システム工 学講座	分散協調型情報システムの構築に必 要な理論的基礎、ソフトウェア構成 法及び情報の意味統合に関する研究
〃	三浦 精	〃 7. 2. 15	東京 大	機械物理工学専攻 材料強度物性学 講座	結晶材料の格子欠陥・結晶粒界・界 面、塑性変形及び相変態に関する材 料物性学的研究
〃	中川 博次	〃 6. 10. 30	東京 大	環境地球工学専攻 水域環境工学講 座	開水路乱流と流砂に関する研究
〃	渡部 良久	〃 6. 12. 25	北海道 大	物質エネルギー化 学専攻 触媒科学講座	遷移金属錯体の特異的触媒機能に関 する研究

部局・職名	氏名	生年月日	出身地 出身校	講座等	研究分野
工学部 教授	中西 浩一郎	昭和 6. 9. 22	京 都 大	高分子化学専攻 高分子物性講座	溶液化学・分子シミュレーション・ 分子化学工学に関する研究
〃	山 川 裕 巳	〃 6. 12. 3	兵 庫 大	高分子化学専攻 高分子物性講座	高分子統計学, 高分子ダイナミク ス及び高分子溶液学に関する研究
農 学 部 教授	増 井 幸 夫	〃 6. 5. 28	滋 賀 大	農林経済学科 農政学講座	農産物価格政策, 農業所得補償政 策, 農産物貿易政策, 農地制度等の 政策効果の経済学的研究
〃	佐 道 健	〃 7. 1. 1	大 阪 大	林産工学科 木材工学講座	木材の物性及び材質評価並びに木質 環境に関する研究
〃	佐 伯 浩	〃 7. 1. 26	島 根 大 鳥取大	林産工学科 木材構造学講座	木材の組織・細胞構造の研究
〃	村 上 浩 二	〃 6. 10. 9	京 都 大	林産工学科 林産化学講座	パルプ繊維・紙及び木材成分の化学 に関する研究
〃	岡 村 圭 造	〃 6. 7. 10	大 阪 大	林産工学科 木材化学講座	セルロースを主とする多糖類並びに 誘導体の分子構造及び結晶構造解析
大学院人間・環 境学研究所 教授	村 井 潤 一	〃 6. 8. 7	大 阪 大	人間・環境学専攻 人間形成論講座	乳幼児の言語獲得・発達に関する研 究, 発達理論構築に関する研究, 障 害児の発達と教育に関する研究等
化学研究所 教授	杉 田 信 之	〃 6. 4. 26	広 島 大	有機材料化学研究 部門	高圧有機化学反応に関する研究
人文科学研究所 教授	小 野 和 子	〃 7. 1. 2	大 阪 大	文化交渉史研究部 門	明代政治史に関する研究, 中国女性 史に関する研究
原子エネルギー 研究所 教授	高 橋 幹 二	〃 7. 2. 16	広 島 大	原子炉保安工学研 究部門	エアロゾル学並びにこれを基盤とし た大気環境と原子力安全問題
木質科学研究所 教授	佐々木 光	〃 7. 1. 8	大 阪 大	木質材料機能研究 部門	木質構造用材料の製造原理, 機械, システムに関する研究及びその構造 材料としての機能の解析
経済研究所 教授	福 地 崇 生	〃 7. 2. 23	愛 知 大	経済計画研究部門	応用計量経済学・計量模型作成に関 する研究, 日本経済・途上国経済・ 地域経済に関する実証分析
大型計算機セン ター 教授	星 野 聰	〃 6. 4. 26	大 阪 大		人文科学に対するコンピュータ利用 とマルチメディア情報の活用に関す る研究
生態学研究所 教授	手 塚 泰 彦	〃 6. 6. 1	北 海 道 東 京 大 都立大	水域生態研究部門	陸水の物質循環に係わる生物過程の 研究
総合人間学部 助 教 授	島 田 三 郎	〃 7. 3. 13	神 奈 川 京 大	基礎科学科 数理基礎論講座	リーマン面, 擬等角写像に関する研 究
理 学 部 助 教 授	中 井 善 寛	〃 6. 11. 16	徳 島 大	附属天文台 花山天文台	太陽及び太陽系天体の観測学的研究
薬 学 部 助 教 授	上 田 伸 一	〃 7. 2. 18	奈 良 大	製薬化学科 薬用植物化学講 座	薬用植物成分の生合成, 植物培養細 胞による抗癌物質の生産, タイオキ シン関連物質の無毒化に関する研究

部局・職名	氏名	生年月日	出身地 出身校	講座等	研究分野
工学部 助教授	西田 耕之助	昭和 7. 3.10	滋賀 京都府 立大 京大	附属環境微量汚染 制御実験施設	大気汚染防止に関する研究, 悪臭の 感覚工学的及び防止技術に関する研 究, 環境アセスメントに関する研究
農学部附属演習林 助教授	古野 東洲	〃 6. 5.15	京 都 京 大	上賀茂試験地	森林保護学 森林昆虫の食害と林木の生育の関 係に関する研究
原子炉実験所 助教授	菊池 忠壽	〃 6. 9.29	宮 崎 京 大	核生物学研究部門	細胞の環境に対する適応・変異の分 子機構に関する研究
医学部附属病院 講 師	澤西 謙次	〃 6. 6. 5	京 都 京 大	人工腎臓部	腎不全に対する血液透析療法の合併 症対策, 肝不全の血液吸着療法, 各 種免疫疾患の血漿交換, 吸着療法等
総合人間学部 助 手	川合 葉子	〃 6. 6. 5	京 都 京 大	基礎科学科 自然構造基礎論 講座	原子爆弾開発過程及びその社会的影 響の研究, 近代物理成立期の研究
理学部 助 手	荒賀 忠一	〃 7. 2.20	大 阪 京 大	附属瀬戸臨海実験 所	熱帯性浅海魚類の分類学的研究及び 各種海産動物の飼育・展示に関する 水族館学的研究

平成7年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の期日等

平成7年度入学試験（第2次学力検査）を、次の予定で実施する。

○ 前期日程試験

月 日	教 科	学 部	時 間
2月25日 (土)	国 語	総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済「一般」	午前9時30分～ 11時30分
		総合人間「理系」 ・理・医・薬・農	午前9時30分～ 11時
	数 学	総合人間「文系」 ・文・教育・法・ 経済「一般」	午後1時～3時
		総合人間「理系」 ・理・医・薬・工 ・農	午後1時～3時 30分
	論 文	経済「論文」	午前9時30分～ 12時30分 午後2時～4時 30分
2月26日 (日)	外国語	総合人間・文・教 育・法・経済「一 般」・理・医・薬 ・工・農	午前9時30分～ 11時30分
	理 科	総合人間「理系」 ・理・医・薬・工 ・農	午後1時～3時 30分
	社 会	総合人間「文系」 ・文・法・経済 「一般」	午後1時～2時 30分
	論 文	経済「論文」	午前9時30分～ 12時

○ 後期日程試験

月 日	教 科	学 部	時 間
3月13日 (月)	国 語	総合人間・文・教 育・経済	午前9時30分～ 11時30分
		医	午前9時30分～ 11時
	数 学	総合人間・教育・ 経済	午後1時～3時
理・医・薬・工・ 農		午後1時～3時 30分	
3月14日 (火)	論 文	文	午後1時～3時
	外国語	*総合人間	午前9時30分～ 11時45分
	理 科	文・教育・法・経 済・医・薬・農	午前9時30分～ 11時30分
	論 文	理・医・薬・工・ 農	午後1時～3時 30分
教育		午後1時～3時	
	法	午後1時～3時 30分	

(注) *総合人間学部（後期）の外国語の試験において、ドイツ語、フランス語を選択した者は、聞き取りテストを行わないので、午前9時30分～11時30分とする。

< 随想 >

“Tawarascher Knoten”

名誉教授 河合 忠一



私共が医学部へ入学した昭和20年代は十分な医学教科書はなく専ら講義のノートに頼らなければならなかった。ところが1回生の2学期になって解剖実習が始まるようになると、これはノートだけではどうにもならない。実習に際して首引きで参照できる図譜付の教科書が愆しくなる。丸太町通りの古本屋を片端から探し廻った甲斐があって、Spalteholz の “Handatlas der Anatomie des Menschen” 1933年版全3巻をやっと手に入れたときの喜びは、われわれの年代のもののみが共有する喜びであろう。その当時の出版物といえばすべてざら紙であり、印刷技術も拙劣であったから、挿入される写真も当然識別不能と諦めていた私にとって、Spalteholz を手にとり、ページを繰って行ったときに見出した図譜の鮮明さ、正確さは、正に息をのむ思いであった。“Tawarascher Knoten” という名称に初めて出くわしたのは、このような状況においてであった。第2次世界大戦の始まる遙か以前に、これだけの優秀な印刷技術をもっていたドイツの世界的な出版物に、堂々とその名を冠した名称が記載されている Tawara なる日本人が、心臓刺激伝導系の全貌を明らかにするという不朽の功績を残し大正3年(1914年)帝国学士院恩賜賞受賞に輝いた九州大学病理学教授故田原^{すなわ}博士その人であることを知るまでにはなお数年の歳月が必要であった。さらに私は医学部卒業後、循環器学を志し、その出発点がたまたま His 束電位記録と植込式電気ペースメーカー実用化の時代と一致したところから、田原博士の名は、一層身近な存在となって行ったのである。

日本循環器学会の機関誌 “Japanese Circulation Journal” は1935年、当時京都大学教授であった故真下俊一博士によって創刊され、私は現在その Editor-in-Chief の任にある。この学会誌に1992年、米国 Johns Hopkins 大学 Walter Ehrlich 博士から突然一篇の論文が寄せられたことから話が始まる。

論文の標題は“心臓刺激伝導系の発見”であり、心臓刺激伝導系の種々の重要な部分の発見者が世上信ぜられてきた通説とは異なることの歴

史的文献考察であった。この論文には田原の業績が田原の写真入りで原著からの引用を含めて記載されていたので、本邦田原研究第一人者、東京女子医科大学須磨幸蔵教授の解説付きで掲載することとし、1993年1月号の巻頭を飾ったのである。ところが強烈な反論が米国 Wisconsin 大学 Bruce Fye 教授から寄せられ、またその反論に対する反論が Ehrlich 教授から投稿されるなど、近來希にみる活気を帯びた論争となった。

その論点は次の通りである。すなわち通説では刺激伝導系の根源ともいべき洞結節は Keith and Fleck (1907年) の発見とされ、また、同結節の下流に存在する房室結節は田原の発見とされ、多くの教科書にもそのように記載されている。しかし Ehrlich は、原典考証により、Keith and Fleck 以前に Hering (1905年)、Wenckebach (1903~1906年) らにより洞結節の研究は行われており、Keith and Fleck からもその原著で自分達が洞結節を発見したとは述べておらず、Hering や Wenckebach の記載と一致したと述べるに止どまり、洞結節の発見は Keith and Fleck によるというよりは、上述の研究者達による成果の集約とすべきであると主張したのである。これに対し Fye は洞結節の発見者が Keith and Fleck であることは疑いもない事実であると猛烈な反対論文を投稿してきた。しかしその根拠は Wenckebach や Wilhelm His Jr. さらには Sir Thomas Lewis や Thomas James などの碩学が、洞結節発見の栄誉を Keith and Fleck に与えているという、他人の意見に基づいたもので、激烈な文章の割にはや、説得力を欠くものであった。Ehrlich の主張によれば房室結節にしても田原の原著発表以前にすでに記載があり、田原がより克明にその構造と機能を解明した業績は大きい、田原の功績はむしろ刺激伝導系が洞結節から始まり、房室結節、His 束を経由し、Purkinje 線維を終末枝として心室筋に拡散するという全貌を明らかにした点にあるという。

戦後間もなく一医学生の眼を射た Tawarascher Knoten が、約半世紀の後に原典に忠実な考証によって、その正しい位置を与えられたという思いと、自然科学における発見者同定の困難さを教えられた思いとの複雑な交錯を味わったことであった。

(かわい ちゅういち 元医学部附属病院長 平成3年退官 専門は内科学、循環器学)